嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第38号／1998年（平成10年）6月発行（年4回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋1－30－9（〒156-0055）　TEL 03-3426-2323
ホームページアドレス　http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/
メールアドレス　kisen@mxg.meshnet.or.jp
・発行人＝石井哲夫　・編集人＝五十嵐猛

「施設と親」

森本照雄

施設は行政から入所者を委託される。この委託を申し出るのは、ほとんどの場合入所者の親であるが、その結果として行政は入所措置を行ない、施設は行政から措置費を受け取ることになる。このようにして施設は行政との関係において入所者の処遇を行うことになる。

法律上はそうなのだが、実状としては施設は親との強い関係の上で業務を行うことになる。

施設にもいくつかの性格があり、施設設立の発起人会の奮闘努力の末に開設された施設、強い経営力を持つ法人が一定の思想のもとに開設した施設、行政が公的資金で開設する施設などさまざまで、施設に対する親の帰属意識も同様にさまざまだと思われるが、共通する親の意識もあるように思える。

それは我が子を施設に入所させざるを得なかった親の、非常に複雑な意識だと思う。

親は我が子を、家庭生活や社会生活が困難だという理由で施設に入れる。障害を持つ本人は、自分がいかに家庭生活や社会生活に混乱をきたせているかなどのことは理解していないので、本人は一向に困らないのだが、家族は非常に困るので施設に入れることになる。

親が施設にADLや社会化のための教育を期待する場合もあるし、施設入所の理由を親亡き後の本人の幸福な生活の保障に求める場合もあるが、結局はさまざまな理由により家庭で本人の面倒を見きれなくなって施設入所を申し出るというのが実状だと思う。

親は自分の都合で我が子を施設に入所させることになるのだが、これについて親はどう考えているのか。

ある親は「自分の都合で子どもを入所させるのだが、本来は家で生活したいはずの子どもの気持ちを思うと不憫でならない。しかし、入所させなければ家庭全体の生活も成り立たないし、とても罪悪感を感じる。親として、この罪悪感を背負っていかなければならない。これは親の業です。」と言っていた。

どんな施設に入所させようと、こうした親の罪悪感は消えることはないだろう。だからこそ、施設で子どもが怪我をしたり、放置されたりすれば、自分が責め立てられるようで、普通以上に腹を立てないと気が済まなくなるのだと思う。

施設は行政との契約で入所者を委託されているのだから、親の不平不満とは関係がないと言ってしまうこともできるが、実質的には親の業をも背負わされた入所者をおあずかりしている訳で、そうであるならば親の業の部分にも真剣に取り組んでいかなければならないことになる。

施設には親に対する対峙的な雰囲気を取り払い、親の申し立てる不平不満の本当の意味を理解し、施設全体としての親の重荷を負担する努力をしていく必要があると思う。

（みずほ学園園長）

社会福祉援助を育てる

社会福祉援助論（その一）

石井哲夫

社会福祉援助をとりまく時代の動きは急速である。いま、社会福祉法人嬉泉において行ってきている社会福祉援助を概観すると、次のようなことをあげることができる。

1　社会福祉援助の基本は、援助を求める人と制度との双方を十分に認識して関わることであろう。いま、変わろうとしている事柄は、社会福祉制度であって、その社会福祉制度の変更によって社会福祉援助の仕組みがどのような性質をもってくるのかを考えなければならない。社会福祉制度が変革される原因が何であろうと、社会福祉制度が変わっていく状況の中で、援助の質を絶えず向上させるような仕組みを考えていかなければならない。今回の社会福祉基本構造改革として、社会福祉援助に競争の原理を導入していくことに賛成の意を表明した最大の理由は、社会福祉界がどちらかというとどのようなサービスをしようと行政が決める規則（監査における指摘も含めて）を犯さなければ一定の基準によって、その仕事が保障されるという措置制度下にあり、資格とか研修に関しても力を入れなかったと言うことを援助現場にあって知っていたからである。

つまり、社会福祉援助には昔から篤志家の示す善意を持って良しとする援助提供者側の恣意的なものであったといえよう。そこには援助の理論や技術は問題とされていなかった。従って、利用者側に立った正しい評価システムが存在しなかったと言えよう。今になって行政から盛んに利用者の利益に立った援助をすることが強調されてくるが、何故に今まで評価や評価システムが問題にされてこなかったのであろうか。

ここで敢えて言いたいことは、評価や評価システムは社会福祉援助の原理・方法の専門性なくしてはあり得ないのである。

2　いままで、我が国が作ってきた社会福祉制度の仕組みは援助の場を設け、そこに援助者を張り付けるということであった。張り付けられた職員は自ずから自分の与えられた枠の中で何をしたらよいかと考え、その中で、最善の努力を尽くすことが目標として考えられていた。その枠以外のことについては、上司が考え、対処することと思いながらも、いつしか自分も上司となって新たな枠組みのもとで仕事をするようになるに違いないと漠然と思っていた。しかし、長い間に小さな枠組みで働くことに慣れた職員は、いざ上司になってもその枠組みを急に変えることは出来ないし、かって体験した仕事の値打ちを変更することも簡単には出来なかった。そこで、出来れば、上司にならずに自分の枠組みを変えないでおこうと思う職員や、上司になっても新しい枠組みを積極的につくろうという気持ちがもてなくなるような事態が起きてきた。それでも、この仕事の制度が変わらない以上は、あまり斬新的な改革的な取り組みをしないでもすむことがあったので、あまり積極的な改革の指針をもとうという機運が起きなくなってしまったのである。

3　社会福祉援助制度は、国の財政に依拠しているところが大きい。限られた枠の中で仕事をより良く進めていくための一つの方向はお金をかけ、人手をかける方法である。このことは必ずしも仕事を良くするという純粋な合理性をもったものではない。お金をかけて人手を増やすことによって、逆に労働の質的な低下を招くことがある。特に、職制で厳重に管理される職場であればあるほど働く人は日常的な枠組みから逃れようとする。かたちの上で逃れられないために、心理的な逃避を図ることになりやすい。社会福祉援助にかける経済的・適正な条件が明確に割り出されないままに、国の財政は逼迫し緊縮化を図らなければならなくなっている。現状では、この辺の経済的条件を上限と考えて、社会福祉援助の質的な向上を促す条件を明らかにしなければならない。

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

保護者との関わり

社会福祉法人嬉泉理事　奥村幸子

私達の仕事は保護者との関係なくしては進まない。今世間では、様々な形で、福祉施設と保護者の関係が意識に上ってきている。乳幼児については、子育て環境が悪化して行く中で保護者への対応が新たな責任として大きな研修テーマとなっているし、成人の入所施設では、利用者の生活を地域に向けて進めようとする職員と、親亡き後の我が子の生活を施設内で確実に保護をされることを願う親との間で、様々なやりとりが起ってきている。このような近頃の動きの中で、30年以上にわたる私達と親御さんとの関りを振りかえる時、その歴史の中に、今後も変わらず守り伝えて行かなければならない柱がいくつかあるように思う。

「信頼し合える関係を育てる努力」と「親の自己決定の尊重」はその最たるものである。仕事を始めた当初、親との関係が深まる中で「親と私達の関係は単なる仲良し関係と同じであってはならない」と感じさせられたきっかけは、親と親しくなるにつれ、子どもの立場に立って親に伝えるべきことが伝えにくくなるという実感であったように思う。子どもの立場と親の立場、そして職員の立場は同じではないことに気づいたとも言える。「親しいけれど、馴れ合いにならない」「お互いの立場・責任を明確にしながら、子どもの為に率直に話し合う」ということを実現するために、私達は「個人で仕事をしているのではなく、チームとして仕事をしているのだ」ということを、我々自身にも親御さんにも確認するために、個人的な贈り物は受けないことを徹底させた。一見些細な出来事であったようにも思えるが、このことがその後の私達の保護者に対する立場を確立したように思う。それから10年経って、袖ヶ浦のびろ学園の仕事が始まった時、親御さんは施設に自由に出入りし、思い思いに親としての気持ちを表現された。掃除や草むしりなどのお手伝いであったり、職員に対するおやつの差し入れであったり、金品の寄付であったりしたが、これら一つ一つは、個々の関係を超えて、親の思いとそれに応える私達の仕事という受け止め方で生かされた。

ひかりの学園ができて15年近くたち、今、そこでの親と私達の課題は、利用者の将来に向けての支援システムの確立である。親としての子どもへの想いがどのような形で保証されるのか、親の自己決定を尊重しながらの私達の援助の仕方はどうあったらよいのかは、私達にとって難しい課題である。自閉症者の自立した生活への援助を考える時、実際に必要なことは、「人による支え」である。それは、手を貸したり世話をするというだけにとどまらない。そういうことは必要のない場合でも、自閉症の人達を理解し、世間との仲立ちになり根気よく話し相手になりながら、事情を説明し、誤解を解き、納得を求め、自分の気持ちや意思をはっきりさせ、どう行動するか決断する方向への日常的な関わりが必要なのである。世の中の大部分の人は自閉症の人と関わったことがない。関わったことがない人には、自閉症児・者への援助に求められる内容についてイメージがもてないだろうと思う。そのような厳しい状況の中で我が子のために最善を望み、希望を実現するためにどのような条件が必要なのか、親にできることを模索している保護者に対して、私たちは入所施設の枠を超え、法人として期待に応えていかなければならないと感じている。目前には様々な障害があるが、大きく動きつつある福祉の動向を見据えて、私達にできることは何か、勉強し、相談していかなければならないと感じている。利用者の将来のため、そして、将来を担う職員のためにも早急な努力が求められていると実感している。

職員の思い

おもうこと

松田　香

今回は私が担当しているのびろ学園のあけぼの組のことについて書きたいと思います。あけぼの組は学校を卒業した、いわゆる加齢児のクラスです。活動の中心は作業となり、次の道、例えば家庭に帰ったり、施設が決まったりすると退園することになります。

退園が決まると本人とはもちろんですが、クラスの皆にも話をします。だいたい、毎日夕方行っている報告会の場で報告するのですが、普段だと少しのうるささに腹を立てたり、それでもおさまらないと自傷、果ては周りの人に八つ当たりなどなど……少しの時間だから聞きたくない事でも聞いてってよ、と言いたくなってしまうのに、誰かが退園するという話しになった途端に、いままでの喧噪が嘘のように静まり返ってしまいます。クラスの仲間がいなくなってしまう寂しさと共に、いつもはちょっと距離をおいて考えている自分の将来のことをみじかに感じ、期待や不安が押し寄せてきてつい無言になってしまうようです。みんな、いずれはここを出て次の新しい道へと進む事は理解しているけれども、そのことは頭の隅に追いやっていたり、日常の事に振り回されて忘れていたり、自分では決められない事だからと思ってあきらめていたりするのに、仲間が行ってしまうということを聞いて、急に現実感がわいてできているように感じます。しかし、そうは思っても自分ではどうすることも出来ず思い悩むばかりだし、私も何の答えも出せず、結局「きっと頑張っていればね……」という何とも曖昧な言葉で締めくくってしまいます。それでもしばらくすると不安を抱えたまま彼らは元気を取り戻してきます。それは退園が決まった人の不安ながらも大きな期待や希望にあふれた晴れやかな顔を見て、自分と重ね合わせ、いつか自分もきっとそんな日があると言い聞かせているのかなと感じます。人生なかなか思いどおりにはいかないけれど、くじけずに頑張ってほしいと切実に思っています。

（袖ヶ浦のびろ学園）

「嬉泉に就職して…」

石井　美帆

学生の頃学童保育のアルバイトがきっかけで、障害を持ったお子さんと関わる仕事がしたいと思いこの世界に入りました。しかし分野の違うところから来た私は、嬉泉に来て学ぶことが皆新しいことばかり。石井先生はそんな状況を知ってか知らずか、一年目は三つの事業所を研修する日々を送りました。

その当時は一つのところに慣れていくのが精一杯であったのに、やっと慣れて利用者とも交流が出来つつある時に次の事業所で研修するという状況に戸惑いを感じ、後ろ向きに毎日を送っていたように感じます。

ひかりの学園のお姉様たちともだんだん仲良くなれて、子どものへやのお子さん達の可愛さにも魅せられた頃、こぐま学園でのスタートを切りました。大きい人から小さいお子さんまで、それぞれいろいろな問題を抱えているお子さんと関わっていくうちに、一年目で研修してきたことが自分のベースになっていることに気が付きました。多くのことを経験することが研修になります、とおっしゃっていた石井先生の言葉がその時に初めて分かった気がしました。

就職して三年目を迎えた今、新しい気持ちで一人一人のお子さんとの関わりを大切にし、スーパーバイザーのもとで経験を積んでいきたいと思っています。

（子どもの生活研究所）

おしらせ

◆今年のバザーは10月11日(日)　世田谷区役所中庭で！

子どもの生活研究所の改築が確定し、いよいよ、古い建物とお別れすることになりました。33回ものバザーに、沢山のお客様を受け入れてくれた園庭も今年のバザーはお休みしてもらわなければなりません。幸い、世田谷区の後援をいただき、世田谷区役所の中庭をお借りすることができ、10月11日に秋晴れ（たぶん）のもと第34回バザーを盛大に開催することができるようになりました。建築資金も莫大な折、職員も力を合わせて取り組みたいと思います。大勢の皆様の例年にも増してのご協力と、お誘い合わせてのご来場を心よりお待ち申し上げます。日にちと会場が違うことをお知り合いの方々にお知らせいただければ幸いです。バザーについてのご連絡は仮園舎のほうでお受けいたします。なお、雨天の際も、広いピロティーでお店を出したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（総務　奥村　幸子）

◆子どもの生活研究所の新築が正式に決定しました！

昨年度から継続して国・都と協議していた、須藤福祉センター子どもの生活研究所の建築補助金の内示が、平成10年6月1日に東京都を通じて通知されました。これによって、同工事の正式着工が決定しました。

子どもの生活研究所の施設建物は、古くは築30年を経過した部分もあり、経年変化による老築化が著しく、防災上の観点からも建て替えが望まれていました。そこで、事業内容を含めて新築計画を検討したところ、現行の精神薄弱児通園施設「めばえ学園」、法人の独自事業である自閉症児・者への個別指導事業「こぐま学園」、家庭児童相談事業「相談部」に加えて、新たに精神薄弱者更生施設（通所）「おおらか学園」と小規模認可保育所「すこやか園」を設置し、それら全てを合築した地上3階建の施設を建築することになったのです。国や都の予算事業の厳しさもあり、昨年度は見送られましたが、この度、格別の御理解を得て決定となったことを、ここにご報告いたします。

（事務局長　石井　啓）

◆第15回実践療育セミナーご案内

テーマ「関係性の援助」
主催　社会福祉法人　嬉泉
　　社団法人　日本自閉症協会

本セミナーは、これまで関係性の発達援助や内的世界への洞察といったテーマを設定し、心の援助ということを中心に企画してきた。今回はあらたに脳科学の視点もとり入れ、脳機能と心の働きについて学ぶ機会を持つ。

今年度から特に社団法人日本自閉症協会と共催することとなった。

◎講師陣・山上敏子（国立肥前療養所臨床研究部長）・杉下守弘（東京大学医学部教授）・渡辺久子（慶応義塾大学医学部講師）・小林隆児（東海大学健康科学部教授）・山崎晃資（東海大学医学部教授）・石井哲夫　他
◎日時：平成10年8月19日（水）～21日（金）
◎会場：全社協・難尾ホール
◎受講料：2万円（1日参加1万円、2日参加1万7千円）
◎定員：320名
◎申込先：〒156-0055 東京都世田谷区船橋1丁目30番9号
子どもの生活研究所内
自閉症実践療育セミナー事務局
（担当：石橋）
Tel 03-3426-2323
Fax 03-3706-7242

◆アトリエAUTOS作品展

◎会期：8月17日～22日
◎会場：ギャラリー青羅
　期間中お問い合わせ
　（ギャラリー直通）
TEL 03-3542-3473
◎入場無料◎主催：社会福祉法人嬉泉――袖ヶ浦のびろ学園開設20周年記念事業――◎後援：日本自閉症協会◎協力：小学館・ギャラリー青羅・日本障害者芸術文化協会・日本工学院専門学校◎フォトCD制作：小野庄一
◆同時出版／作品集『AUTOS―こころの色・心のかたち―』扉の詩／辻章（泉鏡花賞受賞作家）対談／『自閉の文化の発見は、新しい社会を開くためのキー』石井哲夫×小林健二（アーティスト）撮影／小野庄一（太陽賞受賞カメラマン）デザイン／鈴木成一（講談社出版文化賞受賞アートディレクター）◎小学館刊◎B5変形判・二分冊各40頁
◎2500円（税込み）＊7月18日頃発売予定　乞うご期待！
（総合お問い合わせ先）
社会福祉法人　嬉泉
TEL 03-3426-2323
担当／高嶺茂・石井啓・神保育子

嬉泉の出来事

五年目の課題

嬉泉に就職して4年が経ち、今年度から、石井所長の紹介を受けて、日本自閉症協会本部へ週2日、子どもの生活研究所からの派遣で勤務することになりました。

私が協会で担当する主な業務は、ホームページの維持・運営と会員の管理ですが、その他、協会主催のセミナーや会合等の準備も随時手伝っておりますので、皆様にご参加願える機会がありましたら、研究所の事務局等を通しましてお知らせしていきます。自閉症協会では、ホームページ等を使うことにより、情報の収集と提供を行いながら、情報の集約点として自閉症児者の暮らしに役立っていければよいな、と思っています。

私は同時に嬉泉のホームページ維持・運営も行っていますが、こちらも今後ますます発展させて、嬉泉で行っている業務や考えを色々な方に紹介していきたいと考えておりますので、ご感想や良いアドバイスがありましたら、お知らせ下さい。

また、嬉泉が開催するセミナーや美術展も、この度自閉症協会に共催・後援して頂くことが決まりました。今後とも協会を通すことで、嬉泉の業務や考えを幅広く紹介していけると良いな、と思っています。

嬉泉に就職してから、これまで私が学んできたことを振り返ってみると、1年目に利用者へのサービスと共感に徹し、2年目に「受容」という意味をみつめ、3年目に積極的な交流づくりを励んでいく中で、利用者とお互いに相手を受け入れ合えていく関係をつくることを覚え、4年目に利用者の問題点に入り込み、課題的援助を行うことの手応えを持つことが出来ました。そして、5年目の現在は、利用者との受容と交流を深めていくためには、一番大切なことは現場での直接処遇であるという考えには変わりがないのですが、逆にそれだけでもいけない、自分に幅広い知識を持ち合わせた柔軟性と創造性を持つ必要性を強く感じ、見聞を広めることで、自分の援助手段を広げていきたいと思うようになりました。思えば、ここ嬉泉で自分が一番学んできたことは、どんなことにも主体的に取り組み、理解・克服しながら新しい問題に挑んでいく、建設的な力を持つことだったように思います。これからも万能性をもつ自分を目指して、幅広い視野で自閉症児者の療育と暮らしに自分を役立てていきたいと思います。

（五十嵐　猛）

地域の中で　新しい小さな試み

赤塚福祉園では、最近地域の歯科医院の協力を得て待合室での常設の作品展示を始めました。この藤崎歯科医院は、都営三田線『高島平駅』の前に位置する比較的大きな歯科医院で人の出入りも多くあります。このような場で利用者の作品を常設展示することは、法人内でも初めての試みではないかと思います。

そもそもは、昨年度あすなろ2グループ（肢体不自由の利用者のグループ）の山内信平さんのお父様より、「息子とその仲間が一生懸命に頑張っていることに対して何か手伝えることはないか？私が、仕事で関係する大きな歯科医院の待合室に作品の展示を頼んでみようか。」とお話しをいただいたことから始まりました。山内さんは、事前の打ち合わせなどにも熱心に園に足を運んで下さり、「作品をより多くの人に紹介することで、福祉園の活動を地域の人々に伝えられたら……。」「一生懸命に取り組んでいる利用者や工賃を楽しみに頑張っている利用者の励みになれば……。」「利用者の為に、保護者と施設職員が協力してゆくことは大切なことではないか。」などお互いに色々と話をしました。その後、お父様が事前に医院長先生に連絡を取り、園長と私が、活動の様子を伝える写真や作品を持って歯科医院に伺うことになりました。お父様のお話しによれば、事前に医院長に話した感触では、「まだどうなるかわからない。」ということでした。ところが、実際に行ってみると、医院長先生と事務長さんがゆっくりと時間を割い

て、私達の説明に耳を傾け、積極的に利用者や園の様子などについても質問して下さり、その上で、「なかなか味のある作品ですねぇ」と褒めて下さり、「いつでもどうぞ」と快く引き受けて下さいました。

展示に際しては、歯科治療に来て緊張しているお客様の気持ちがほっと和むようなスペースを作りたいと思い、木製の棚にあたたかい雰囲気を出してディスプレイをするように心掛けました。今回は、あすなろ2グループより牛乳パックからのリサイクル葉書（ハーブなど様々な自然の素材をすき込んだもの）と5名の陶芸作品を出展しました。今後、他のグループの作品も含め、2か月に1度ぐらいのペースで作品を入れ替え紹介してゆくつもりでいます。

展示を始めて半月が経った現在、作品に興味を持ち歯科医院の受付に作品の値段をお聞きになる方も結構いらっしゃるとのことです。この常設展示の場を通して、地域の方々に私たちの活動と作品を知ってもらい、福祉園祭りや販売の場などにより多くの方に足を運んでいただけたらと思っています。そこで、利用者達が、地域の人と交流し、自分の作品を販売するなど社会参加を展開する場が広がっていったらと期待しています。

（山下　華）

発信は「人」から。

今、アトリエAUTOSが動き出し、作品たちが学園の外へと歩み出してから、その作品が人を呼んでいる。

小学館から出版される作品集は、その制作過程において、編集長の平野氏や作品集の中で石井所長と対談される、アーティストの小林健二氏が学園においでになった。お二方とも実際に袖ヶ浦の地に足を踏み入れて、豊かな自然にしばし心を和ませつつも、少しの緊張感を持って施設の生活に触れてみたことは、これまであまり出会うことがなかった体験だったようだ。平野氏は、山岸さんと石井所長の共著『自閉症克服の記録』を読んで、裕さんの感性に「鋭いねぇ」の一言。小林氏は、石井所長との対談を前に、「利用者の方たちは職員さんと仲良しですね。」「ここは、心を汲もうとして人と関わっている。社会にもそんな人たちが増えるといいのに…」と言われた。石井所長との対談は、4月27日に小学館にて無事（?）終了し、アーティストとセラピストによる感覚世界についての興味深い話しが展開された。（詳細は作品集の対談ページをお楽しみに！）

小林氏が学園を訪れた時、ひかりの学園のメンバーと『お話しの会』が設けられた。参加者は、山岸裕さん、市川浩志さん、伊藤訓育さん、田中雅也さん、飯田真奈子さん、皆さん手を挙げての『発言会』となり、1時間弱の時間はあっと言う間に過ぎていった。皆さんの感想はというと、「良かった」。話し足りなかった裕さんは、小林氏に宛てて手紙を書いた。氏からの返事を楽しみに待っているそうだ。

夏の、ギャラリーでの作品展示会に、また一人協力者が現れた。ライターの熊谷さんの知り合いで、ご本人も作家である矢部史朗さんだ。彼は、日本橋三越の展示会場のデザイン、施工を手掛けた人であり、日本工学院専門学校マルチメディアアート科の講師もされている。その専門学校の生徒さんたちを巻き込んで、今回の展示会の企画に、空間デザイン・施工の協力をして下さることになった。授業では、嬉泉や自閉症のことを紹介する機会を持ってくれるそうだ。福祉の教育現場のみでなく、デザイン教育の場に、この企画を通して、仲間入りすることになったのだ。

人との出会いは、いろいろな機会を通してあるということが、まさしく実感できたこれらの出来事。事が動いて、気が付くと人に出会っていたんだなと思う。作品が人を呼んだということ、その作品は人によって出来たんだということ、そう考えるとやはり人が人を呼んだのかなと思う。改めて「人」の魅力を感じずにはいられない。

（神保育子）

ひかりのタイムス

独立第32号

AUTOSインタビュー

インタビュアー　山岸　裕

神保育子（社会参加コーディネーター）さんに聞く。

山岸「AUTOSの意味は何語ですか」

神保「ギリシャ語で自分自身で」

山岸「AUTOSの名付け親は誰ですか」

神保「石井哲夫先生です」

山岸「利用者達がAUTOSに与える影響は」

神保「あの本になったり、展示会を開いたりするのも、利用者たちのおかげです。作品を通してより多くの人達に全国各地の人達にメッセージを伝えられます。」

山岸「メッセージは？」

神保「それがAUTOSのコンセプト」

山岸「何？」

神保「芸術社会にデビューする」

山岸「コンセプトは」

神保「内に秘めたものを外に出す」

山岸「本になったりして、どう作品に影響されてくると思いますか、アーティストも含めて」

神保「作品をいいと思う人が増える事は作る人にとって大きな自信につながると思います。」

山岸「撮影を通してカメラマンやライター等の人との関わりで社会化されると思いますが」

神保「少しずつゆっくりと社会化をひろめていければいいと思います。一杯取材が来て裕さん、どう思う。AUTOSは入り口。社会化するのはみんな。ひかりの学園も、自閉症の人も、裕さんも」

山岸「よく意味がわからない。AUTOS＝陶芸で、他の利用者は関係ない」

神保「関係ないと思いますが、注目される手段です」

山岸「ようするに、AUTOSを核として広い意味での社会参加をすること」

神保「そうです。そうです。社会参加は会社に勤めるだけではありません。サラリーマンもいれば、職人さんもいて、芸術家もいる。」

山岸「それの障害者版」

神保「いろいろな、それぞれを生きる」

山岸「そういう事。この嬉泉の読者に伝えたい事。」

神保「本を買ってください。展示会は8月17日から22日を予定しています。」

山岸「本のタイトルは」

神保「AUTOS」

山岸「値段は」

神保「まだ未定」

あとがき

世紀末というのは新たな試みが生まれていく時代だという。

おおげさにいえばAUTOSはその世紀末だから出来る試みなんだろう。芸術を核として広義の社会参加を試みる。社会参加は字をひっくり返して会社参加と思っていた私には衝撃だった。出口無き不況の中で手間のかかる障害者は爪弾き。

社会参加が会社に行く事。地域でグループホームで生活する事。この二つは金を稼ぐということでリンクしている。頑張るイメージがある。さてそれとは別にAUTOSは、爽やかだ。自分のやりたい芸術を通して社会参加をするという柔軟な発想は清々しい。

新風を吹き込むという他はない。神保氏は施設と芸術家をつなぐコーディネーターであり、そこから発する言葉は新鮮な感動でもある。

障害者も人生を頑張るだけでなく、人生を楽しみたいものだ。AUTOSの仕事に肩肘を張る事もなく取り組む神保氏に爽やかさを感じた。こういう仕事も肩に力を入れずに頑張らない頑張りで気持ちのいいものだ。

AUTOSが多くの人の感動を呼ぶ事を願い筆をひとまず置く。

（山岸　裕）